



大泉小だより

令和6年6月28日
練馬区立大泉小学校

移動教室で「見当を付ける力」を伸ばす

校長 小高 敏 男

6月に6年生の軽井沢移動教室が実施されました。5年生は11月に実施されます。保護者の皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

さて、移動教室は、子供たちのどんな力を育てているのでしょうか？

共同生活を通して、集団行動を学ぶ、友達との多くの関わりを通して協力する心や相手を思いやる気持ちを育む、親元を離れた生活を通して自主自立の心を育てる・・・多くの力や心を育てています。私は、移動教室の様々な学びの中でも「見当を付ける力」の重要性を感じています。

6年生の移動教室の先生方の言葉の中に、「自分で、自分たちで、考えて行動する」という言葉がありました。この言葉には、主体的に移動教室に取り組む子供たちの姿が見られることへの期待が込められています。子供たちは、見事にその期待に応え、常に予定時間の5分前には準備を整え集合する姿を見せてくれました。早いところでは、20分前には準備完了している班もありました。

この子供たちの行動の裏には、次を予測して行動する、あるいは、次の次をも予測して今の行動を判断する子供たちの思考があったはずで、そして、その判断には、「見当を付ける力」が発揮されたはずで、布団を敷くことにかかる時間、カードゲームを一回行うのにかかる時間、荷物整理にかかる時間・・・。時間どおりに行動するためには、必要な時間の見当を付けて行動することが重要です。

移動教室初日には、子供たちから「あと何分ありますか。」などの質問がありました。時間を意識して行動しようとする現れです。先生方は、更に上を考えてその質問には答えてくれませんが、「しおり」と時計を見れば子供たち自身でも分かるからです。千尋の谷に子供を落とすライオンではありませんが、子供に楽をさせるのではなく自分自身で考えさせることの重要性を感じます。子供たちは、行動に要する時間の見当を付けながら生活し、5分前行動を実現させていました。

人の生活や仕事には、常に見当を付けながら過ごしていることが多くあります。夕食の買い物をするときでも、食材の量を食べる人のことを考えて見当を付けます。家を出発するには、それまでにやることにかかる時間を逆算して起きる時間を決めます。個人差はありますが、全てが見当を付けながら生活していると言えるのではないのでしょうか。

これらの生活経験から養われる「見当を付ける力」には、時間だけでなく、物の重さや量、長さ、速さなども含まれ、それを「量感」とも言います。この量感は、数学的思考力とも関係し、算数の問題を考えるときにとても役立ちます。問題を具体的にイメージしたり、答えの見当を付けたりするときに、とても重要な感覚です。

しかし、現代では、この「量感」や「見当を付ける力」を育む生活経験が少なくなっています。目的地までかかる時間は、ナビが教えてくれます。お風呂に水を入れる時間は、見当も付けずに自動で止めてくれます。便利になる一方で、人の「量感」や「見当を付ける力」が育まれなくなっているのです。

「見当を付ける力」や「量感」は、生活の中で工夫すれば養われるものです。生活の中で物の長さを伝えるときには、身長や手の平の長さとは比べて表現することがあります。この「比較する」「比べる」という思考を生活の中で多く行っていくことで「量感」が養われます。この感覚を育む最良の教師は、最も生活時間を子供と共有している保護者の皆さんです。ぜひ、子供とのコミュニケーションの中に、「量感」や「見当を付ける」、「比較する」という視点を入れてみてください。